

こんにちは。嘱託員の村上です。

1月10日から新しい館内展示「連絡船を知らない君へ～青函連絡船終航30年～」が始まりました。懐かしい写真や青函博に関する資料などを展示しておりますので、市民図書館へお越しの際はぜひご覧ください。

さて、皆さんはお正月をどのように過ごされましたか？ テレビでニューイヤー駅伝や箱根駅伝をご覧になったかたも多いのではないのでしょうか。

「駅伝」という競技が誕生したのは大正6年(1917)のことでした。この年、初めての駅伝大会「東海道駅伝徒歩競争」が行われたのです。スタートは京都・三条大橋、ゴールは東京・上野不忍池という500キロ以上のコース(23区間)で、4月27日から4月29日までの3日間にわたって行われました。



上野不忍池ほとりにある「駅伝の碑」(筆者撮影)

実は、大会を主催した読売新聞社では当初「マラソン・リレー」という名称を使っていましたが、青森県にゆかりのある人物によって「駅伝」と命名されました。その人物とは明治41年(1908)から大正2年まで青森県知事を務めた武田千代三郎たけだちよさぶろうです。



武田千代三郎(『青森市史』人物編)

武田は東京帝国大学在学中、日本近代スポーツの父と呼ばれるフレデリック・ストレンジからスポーツ論を学んでおり、スポーツに関する著書もあります。青森県知事時代の明治44年には閑院宮殿下の青森県訪問を記念して合浦公園で陸上競技大会を開いたこともあり、青森県の陸上競技の草分けと評価されています。また、大正2年からは大日本体育協会(現日本スポーツ協会)副会長も務めました。

「東海道駅伝徒歩競争」の開催に当たり、武田は読売新聞社の社会部部長・土岐善磨^{ときぜんまる}から大会名について相談を受け、古代の交通制度である駅伝制度から「駅伝」と命名したといわれています。

なお、この大会には明治45年のストックホルムオリンピックに参加したマラソン選手・金栗^{かなくり}しろうも出場しています。金栗といえば今年のNHK大河ドラマ「いだてん」の主人公のひとりですね。

「いだてん」の登場人物を確認したところ、なんと、武田の名前もありました。「いだてん」をご覧になる際は、ぜひ武田にも注目してくださいね。

※今回の内容は『21世紀スポーツ大事典』(2015年 大修館書店)、武田薫『マラソンと日本人』(2014年 朝日新聞出版)などを参考にしています。